

## 自評論争覚え書き (二)

——緑雨の「『吾亡妻』は偽物なり」をめぐって——

池田一彦

### 一

さて、緑雨は「正太夫」名で著わした「荊鞭」において「吾亡妻」を「偽物」と断じ、厳しい宮崎三昧批判を行うが、もちろん緑雨の論難は突如として単独に現れたものではない。それには、先行する他の二つの文章が——それらはともに批判的な性格を有した点でも相通ずるものだが——与って大きく力あったと認められるのである。当然これらを見逃すわけにはいかない。

先ず一つは、再三今までにも名を挙げてきた雷音洞主露伴の「虚子が言について」である。

露伴の「虚子が言について」は当時彼の拠っていた新聞『国会』の文苑欄に八月十九、二十、二十一日と三日連続して掲げられた。

露伴がやはり「雷音洞主」の筆名で綴った「風流悟」に対する「虚子」の評（先の「偶筆」文）の不当を衝いたもので、「偶筆」掲載の翌日早々からの掲載である。

我はじめ筆を執て風流悟を作すや心ひそかにおもへらく、野人の悪文畢竟江湖の秀才雅客が評論を招くに足らざらむと、と初めに謙遜の辞を述べている（これは後に緑雨によって自記広告文との落差を冷やかされることになる）<sup>注1</sup>が、続けて「昨偶然<sup>たま</sup>千朶山房に群妖と相会するの節<sup>ついで</sup>」に、主人（鷗外）が露伴を「論し」て、

雑草は摘み去るべし鉄鏽は着かしむべからず虚したる評論言語とは戦はざるべからず戦つて而して我屈するか彼窮するかを明かにせざるべからず、笑つて答へず顧みて他を云ふが如きは、甚だ高きに似て而して甚だ虚したるに過ぎず、

云々と語り、自らもそれを諾したことを記している。こと、既に  
して「虚子」の「偶筆」と相応じていたと言うべきであろう。注  
意しておけば、右のように語ってやがて露伴に「虚子」（三昧）  
非難の筆を執らしめた山房主人こと鷗外が、同じくやがて緑雨に  
対し三昧弁護の筆を執ることになるのである。「雑草」「鉄鏽」  
「虚したる評論言語」は、露伴・緑雨にとっては「虚子」三昧の  
「偶筆」であり、鷗外にとってはそうでなかったということにな  
るわけだ。皮肉な巡り合わせというべきである。

さて、丁度「今早飯前東京朝日新聞を読」んでみれば「虚子な  
るものあり偶筆と題して我及我作について云々」している。「我  
豈能く黙して止み得んや」ということになるのである。まして  
「仄に聞くとくによれば虚子は文壇の大家」であって「敵手と  
して恥づべきものにあらざる」こと明らかなのであってみれば尚  
更である。

露伴が本文でとり上げ問題としているのは、大きく二点に絞ら  
れる。第一は、例の「風流悟は何ぞ其れ悲しきや」云々の箇所で  
ある。露伴はそれに対して、次のように非難し抗議した。

笑ふに堪たり笑ふに堪たり、又憫むべし悲むべし、虚子は  
読書の法さへ知らざる人なり、既に読むことを会せず何ぞ能  
く言ふて当らむや、『吾亡妻』は名文なり至情より出し文字

なり実に小さき胸より溢れたる涙は大分に含まれたる文字な  
り故に虚子が涙の三昧道人が吾亡妻に堕ちたるは至当のこと  
にして疑ふべからずまた虚子が眼の三昧道人が吾亡妻に紅化  
せられしも疑ひ問ふを須ひず唯風流悟を云々するに当つて何  
の故に吾亡妻を三人までも引き出し抱一庵の虚子が眼前なら  
ざるところに於て泣きしことまでも引き出し、然して後に卒  
然として予が涙の風流悟に堕ちし所以の者は予が眼の『吾亡  
妻』に紅化せられしが為にはあらざるかと云ひ出し来りたる  
か、嗚呼虚子は能文家なるかな能文家なるかな、是の如く影  
を仮りて真を露し羊を云ふて牛を説き母家を利用して底の用と  
する文法を我は悟り得て大愉快を感じぬ、恰も吾亡妻を読ん  
で人間が同類の死亡に試みられし或有様を知り得しを喜びし  
時のごとき愉快を感じぬ、また其文法を覗ひ得て大に悲みぬ、  
恰も我が嘗て病者を欺きし時の如く悲みぬ（以上十九日掲  
載分より）

至極もつともない分である。露伴の「吾亡妻」に関する二重  
鍵括弧使用は不統一だが、内容的に特に末の一条など、「吾亡妻」  
本文と「偶筆」文との乖離の甚しきを諷していると読める。露伴  
は「虚子」の筆法の不当を咎めるために、続けて「虚子が文法は  
実に能く勢を用ひたるものなり、我今試みに虚子が文法にならつ

て言ふところあらんか」と、その「文法」の模倣を示しているが、これは仔細に見ると必ずしも正確な模倣と言うことはできず、却ってそこに露伴の「虚子」への陰の主張ともいふべきものが看取できるのが興味深い。その模倣とは、たとえば以下の如きものである。

蓋し虚子が文法は是の如きのみ、曰く「君の衣は何ぞ其れ美なるや采色绚烂として真に我をして羨ましむ、さるは顧ふに我が眼の我が故き衣に眩耀せられしがためにはあらざるか」

と、嗚呼能文家の妙技なるかな妙技なる哉、（もう一例は略す―筆者）嗚呼快なるかな此筆法や、我此法を得て後好賛辞を我が文に加ふることを能<sup>よ</sup>せんとす、（傍点筆者）

なるほど「虚子」文の当該箇所にはほ忠実に模倣を試みていると言い得ようが、圈点で注意したような「我が」に当たるものは「偶筆」の方には無い。もちろん「虚子」文は三昧の匿名で物せられているので「予が眼の我が『吾亡妻』に紅化せられし」などとやることはそれ自体矛盾してくるので「我が」の二字など付される筈もないのだが、その筆法を模さんとして露伴が、その二例ともに敢えて「我が」の二字を付し、また次いで「我此法を得て後好賛辞を我が文に加ふることを能せんとす」と述べたのは、露伴が「虚子」の正体をつとに三昧と（見抜いてか）知っていたか

らではないかと推される。知って、その執拗な文体模倣という形式によって原文の持つ奇怪な味わいを暴露・剔抉し、筆記者三昧に反省を迫ろうとしたのではなかったか。

思えば「偶筆」の冒頭は「天心、露伴、太華、篁村、三昧の諸君に誘はれて香魚を熊谷の河に漁し」云々で始まっていた。前述の如く、もしこれが事実なら（逆に事実でないなら）たとえわざわざ「三昧」の名も持ち出してあるとはいえ、当の露伴に「虚子」は誰か推されぬべくもなかったろう。

ただ、露伴自身は「仄に聞くところによれば虚子は文壇の大家」で、という言い方をしているだけで最後まで「虚子」の実名を公けには明かそうとしていない。（この後の「『虚子』が言について』について」でも同様である。）それはおそらく露伴と三昧との個人的関係（文学上の立場が同じ根岸党に属する、ということ以上に、何よりも三昧は露伴にとって東京師範学校附属小学校時代、漢文を教授した師でもあった<sup>注2</sup>）がそういう配慮をとらせたので、そして、だからこそ却って「虚子」という匿名の質（その胡散臭さ）を鮮明に浮かび上がらせることになっていると考えられる。

露伴の弁に戻ろう。「紅色に看入りて」以下の比喩的言い回しを用いた箇所について「受の残影然らしむるところ」（傍点原文）で、「色に於るのみならず」、「香」にも「声」にも「味」<sup>あじはひ</sup>にも

そういう物理的現象は有るとし、「虚子」もまたそれを知って

「独り心が先入者の残影遺味に誤らるゝことを知ら」ず、ましてや「名文好辞吾亡妻の如きものは深く印痕を霊台にとゞむるものなるを忘れ」て、かような言語を弄したのを先ず訝る。そして、

故に我は曰はんとす虚子の吾亡妻を読んで直ちにまた風流悟を読み而して紅化眼より涙珠を墮せしは我には極めて僥倖にして加も我が極めて恩を三昧道人に荷ふべきところなりと、のような皮肉を投げかけている。さらに、今度は改めて「虚子」の「紅化眼をもつて風流悟を照ら」した「読書の法」とその言を「一毫疚しきところなき乎」と咎め、次のように「虚子」名の名実相伴わぬことを責めている。

嗚呼虚子何ぞ其名のみ虚子にして其胸臆の廓然として大に虚しからざる、虚子何ぞ必要な虚心の二字を等閑にし去し、虚子何ぞ虚うして而して往き実して而して反るといへる好語を等閑にし去りし、虚子苟も虚三昧に入て能く虚の一字参得し来らば如是き虚して虚さざる半虚の事は無かりしなるべきに（以上二十日掲載分より）

これまた、露伴の言い分はもっともと思われる。「虚三昧」の語など、三昧と知って故意に露伴が挿入したものと勘繰れないこともない。

さて、露伴が問題としてとり上げている第二の点は、「風流悟」の内容にたち入って評を下した際の「偶筆」の

予は明かに作者が実に風流悟中の人たるを認めんとす如何となれば予も亦実に會て風流悟中の人たりしことあればなり

という言葉であった。（露伴文ではわざわざ右引用箇所を圈点を付してある。）露伴はやや回りくどい論法で「虚子」に反論している。「南齊沈約が神不滅論」の一節を持ち出して、そこで「休文」が「賢愚の間に大溝を画し鉄門をなし相窺せず相曉解せず」と、「賢」と「愚」を厳しく分けて断じてあるのに最初は疑念を抱いていたが、この度「虚子が言によつて初めて我が誤まりしを悟」った、「我が愚にして虚子が論理を遂に解する能」わぬというのはもっぱら自分に責めがあるのだろう、といった反語的形式で抗議に及んでいるからだ。そこで露伴は、

虚子が風流悟中の人たりしことありしといふことを理由として作者が実に風流悟中の人たるを認め得べきものならば（中略——「空屋」「牢獄」等の語を例に「偶筆」当該箇所の模倣的言い回しを露伴流に試みている。——筆者注）虚子が風流悟中の人たらざりし時は然らば作者は風流悟中の人たらずと認められべきか、然らば作者が風流悟中の人と認められ或は風流悟中の人にあらずと認らるゝは都て虚子と風流悟との関係乃

至虚子一人の如何によりて定られべきか、論法の不可思議なる又極れりといふべし、如是き論法は如何なる国の演繹的法式なるべきか帰納的法式なるべきか人間の信ずるを得べき論法なるか人間に果して能く解し得られべきものなるか、

(以上二十一日掲載分より)

と「虚子」の評言の取るに足らざることを指摘している。しかし、この指摘もまた「虚子」の「偶筆」文に対して至極当然、間然する所がないのである。(そもそものが「虚子」の当該部分の評言は無意味な感の拭えないものであったのだが)。

だが、以上のような露伴の反論文「虚子が言について」は二十一日分掲載のあと、しばらく(未完)のまま休載する。そして約一週間後の二十九日、同じ『国会』紙上に「虚子が言について」という比較的短い一文が掲げられる。「虚子が言について」未完中絶の理由を読者に説き示したものだ。

虚子が言について三日間も既に文苑欄内を借りしが尚我が言は尽きず我意も尽きず、将にいよ／＼言ふところあらんとせらるに際し、一度ならず二度ならず三度までも我が家を訪ふて、我に面は会せざりしが我弟に對ふて、御手やわらかに願ひますと伝言を托したる人あり、即ち虚子なり、我と虚子とは俱に天を戴かざるの恨みあるにもあらねば虚子が言を納れて、

乃ち我が言を中止す、言へば決して御手やわらかならざればなり、蓋し虚子が所謂御手やわらかに願ふといへるとき囁をなしたるは何の故か、我之を察し之を云ふに忍びず、読者幸ひに我が酷ならざるを咎むるなくして可なり

以上がその全文である。おそらく、まだまだ継続する予定という「虚子が言について」叙述の過程でわが名を素っ破抜かれてはとの懸念からであろう、「御手やわらかに」と露伴のもとへ依頼しに來た「虚子」(こと三昧)の姿が描き出されている。「偶筆」は確かに初めから三昧の文と読まれては都合の悪い文章であった。露伴の「察し」たのもその辺の事情だろう。三度まで訪問した「虚子」に「面は会せ」ず、「弟」(成友)が直接会見したという状況設定などは、露伴一流の虚構による配慮と見做すことも可能である。だからこそ、「虚子」なる匿名を許いて世に公けにし、文壇上の一大問題としてとり上げて示した緑雨の功積を考えてよい。それこそ「正直正太夫」の一大真面目の發揮であったと言える所以である。

結局、「虚子が言について」という文章は何であったのかといえ、それは自作「風流悟」を不当な形で評された(よりの確には三昧の「吾亡妻」を称揚するダシに使われた)ことへの反論・抗議の文であり、その言い分は正当な自家弁護の言であった。不

当は不当であるが故に責めたが、必要以上の攻撃は（おそらく個人的関係からくる理由もあって）避けられた、そういう文章であったと思われる。そして、やがてこの文の「偶筆」に対する批判的要素が緑雨の「荆鞭」へと吸収されていったのである。

ところで、露伴文に関して述べてきた事のついでに、露伴の「吾亡妻」に対する評価について一言しておこう。露伴は右の「偶筆」への抗議文「虚子が言について」の前後、はなはだ断続的で間のあいた形ながら、同じく『国会』の文苑欄に「靄護精舎快話」を掲載していた。中で、八月三十日の「其二十六」からはしばらくこの『国民之友』夏期付録作品に言及しているが、今「其二十六」のみ左に引いてみる。

国民之友夏期付録の、曇天は辛苦より成りしものならむ。空屋は尚一層深くして長き辛苦より成りしものならむ。雑説は説の妙なるにあらず文の妙なる、即ち鉄を点じて金となせるのみならむ。吾亡妻は情の趣きあるにあらず事の趣きある、即ち鉛を掩ふて銀となせるのみならむ。風流悟にいたつては華胥子の評きはめて平に極めて淡に極めて刻に極めて毒に、雷音洞主もまた鼻梁を一振せられたるに驚かざるを得ざりしなるべけれど、我敢て風流悟を評せず、曇天をとつて先試まっところに

評せん。

露伴の「吾亡妻」に対する評価のいかなるものであったか、ほぼここに明瞭であろう。「虚子」文とのいきさつがそこに与っているであろうことも想像するに難くない。（末尾部分なども「偶筆」を意識したと見られるフシがある）だが、なによりも右の評言で大事なのは、それが当時正しく絶讃の最中にあつた「吾亡妻」に批判的眼差しを向けたおそらく最も早いものの一つであつた、という点にある。このあと見る福泉みやびの「吾亡妻」評とともに、こうした露伴の「吾亡妻」への評価は、やはり緑雨の「吾亡妻」否定へと連なっていくものである。

## 二

次いで、緑雨の「荆鞭」の現れる素地をつくつたと思われるもう一つの批判的文章について見る。『読売新聞』に九月二日から七日にかけて連載された「福泉みやび」の「国民之友夏期大付録評論」である。第一回が総序めいた文章と「吾亡妻」の批評であつた。「吾亡妻」評のはじめは、他の評者と変わらず、

尋常仮作の小説と違ひ一篇の文字都て是れ腸底より泌出せる  
真衷実情、血に非ざるはなく涙に非ざるはなく真に是れ字頭  
針あり自ら吾人の心竅けうを刺し哀思縷々として出て絶えざらし

## むとでもいふべき歟

とひと通りの称賛をほどこすが、やがて「此篇に於て哀情の提起せらるゝは顧ふに誰も同様のこと」と思われ、かつ「矢鱈に褒揚賛美することは自から他に其人ある」と判断されるので「予も寧ろ蚤取眼になつて何とか間然する所を見付んと欲す」と本評論におけるその立場を明らかにしている。それも「敢て意地悪をなさん」との意からするのではなく「先輩の文を読みて我疑を質すは後進の為すべき」一種の義務だから、と断っている。具体的な評としては先ず、

全篇固より真摯惻怛彼の仮構戯為の小説と同視す可らざる所のものとはいへ妻を喪うてはえづらくは普通の人情、此んな線言は誰でもいふもの、それを委曲に写したる迄、

云々とその「平々凡々」たる趣向を指摘し、それにもかかわらず「唯其一处推服せざるを得ざる」点として、「照子花卉を愛す」の段における「顧みて床間を見れば花は亦人と共に萎みぬ」のような、「哀情を物に寓し頭はに言はずして却つて深く感」じさせる「書方」を称えている。問題はこのあとである。この妙所を引き合いに「吾亡妻」の結末部を難じて次のように批判を加えている。

偕て思ふに此の如き句を以て本篇の終局を収めたらんには如

何計り余情綿々として一層人を泣いむべかりいに口惜しきは結末の数言ぞかし「顧ふに予が齡今茲三十萱氏六旬に三を加ふ侃方に六歳侃や再び母なかる可らず萱氏再び婦なかる可らず再び妻なかる可からず」云々讀で此に到り予は何となく興味の索然たるを覚えずんばあらず全篇畢く哀悼せるなり慟哭せるなり亡人を追懷せるなり而して結末の此言却て大に其情を減殺し了するものとならざるか夫れ哀悼や慟哭や其情の過去と聯絡を絶ち難きより生ずるものにあらざるはなし、さればどこ迄も過去の追懷たるべし未來の計較たる可らざるなり若し未來の計較より出んか其哀悼や仮のみ慟哭や偽のみ即ち己が都合の為に哀慟するものとなりて他の不幸の為に発するものにあらざるなり昔は夷齊武王の馬を扣へて父死して未だ葬らず而るに干戈を動かすは孝と云ふ可らずと云へり今や道人妻死して未だ幾ならず即ち繼室を言ふ是豈に稍々不親切なるの嫌なきを得んや固より道人が此言たる其亡人を懷ふの情より出るもの即ち過去の追懷たる明なりと雖も寧ろ此言なきの單一穩妥なるに如かざるにはあらざる乎（傍点原文）

「吾亡妻」の結末を難じた評は多いが、最も早く批評としてこれを為したのは「みやび」であつたと思われる。特に右の箇所は、正面きつて堂々と、理路も甚だ整然として「吾亡妻」の難点を剔

決したもので、見事な批評といえよう。

もっとも、このすぐあと「吾亡妻」の冒頭「明治廿四年六月廿二日予は吾亡妻を紀するの不幸に遇へり」及び「六月に至り衰弱転た甚しく遂に廿二日払曉まだ夜深きに山の端に傾く月の光をたよりて照子は只独り悲き旅へ啓行し」（以上傍点筆者）云々の記述をもとに「察する処本篇は道人が細君を亡はれし当日直に筆を揮はれたるものと見えたり」云々と執筆日時について述べているが、この点は前稿で既に見てきたように、照子死没後の葬式などについて記されてあったので、必ずしもそうとは決定できないと考える。だから残念ながら、

細君湓逝の日親戚知人が首を集めて哀慟せる声の中に筆を執るさへ俗人に在らば如何しく思はるれどコハ文人の為す事として見免さんも病妻が玉の緒方に絶えたる日「予が齡今茲三十再び室なかる可らず」と書き収るに至ては予は道人が哀情の浅深に疑なきを得ざるなり（傍点原文）

という批判は（日時鑑定の錯誤を含むという点で）半分方割り引いて受けとめなくてはなるまい。（実は緑雨も、後の「鷗外漁史の弁護説」中、日時に関してこれと似たような過ちを犯す）「みやび」の批評は、続けて再び「結末一言」をふり返り、「かの倭武が『吾妻はや』の一嘆に幾着を輸了するに至りたるを惜まずん

ばあらず」と述べ、また「是れ徒然艸に所謂栗栖野の柑樹の囲ひと一般の笑話とならざるなきや」と作者に質す。が、最後は一転して、はじめと同じく好意的な全体評を加えて終わる。

通篇亡人の性質才幹を描き得て躍々出んと欲す直に喚て以て故宮崎照子嬢の墓表と做すも可ならん而して嬢の内助を叙する処は自から道人の境涯に透映し「照子の初めて予に帰ぎし当時」の条の如き文面にてこそ照子嬢を主写せるなれ其実道人が自伝と謂ふも亦可ならん要するに好文々々

その本質を「道人が自伝」と喝破しつつも、「要するに好文々々」と締め括るあたり、結末部への批判が実に鋭い正鵠を得たものであっただけ、全体として今一步不徹底の感なきにしもあらずだが、翻って、その点を徹底させたのが、翌九月三日の『国会』紙上に掲げられた緑雨の「荊鞭」であったと見做すことができるのである。

### 三

以上見てきた露伴の反論とみやびの批評の（前者は「偶筆」文を、後者は「吾亡妻」そのものを対象として扱っていた）、それぞれ主要な批判的要素を受け継ぐ形で「正直太夫」の緑雨が、三昧及びその作物「吾亡妻」を批判・攻撃することになったのが



「荆鞭」の(二)「吾亡妻」は偽物なり」なのであった。前日九月二日にその(一)の「荆鞭をつくる所以<sup>注5</sup>」で公正無私の文壇時評宣言をなして直ぐの、三日の『国会』文苑欄掲載だったわけだが、そもそも緑雨が「荆鞭」なる連載批評形式をこの時期開始したのも直接にはこの「吾亡妻」をめぐる一連の文学状況に触発されたものだったと考えるのが自然である。すなわち『国会』新聞文苑欄内で石橋忍月に代わって批評を担当し始めた者としての使命感に一つの方向性を与えたのが三昧の「吾亡妻」だったと言って過言でない。そして、これによって従来からの緑雨による文壇大家批判はより一層明確かつ激越な輪郭を与えられることになったのである。

さて、「荆鞭」(二)の本文だが、冒頭に南翠外史と抱一庵主人の「吾亡妻」評を紹介し、当初自分が彼等とその感を同じくしていたことを「南翠の所謂熱血熱淚眞愛眞情を以て作<sup>な</sup>されたことは其一頁すら読了らざるの時に於て已に明かに認めたり偶々<sup>たまたま</sup>之れを評せよといふ者のありけるも予は敢て評せず徒ら<sup>いたづら</sup>に涙に圈点<sup>いっぴん</sup>を打つて世の指目にかゝらんよりも黙読再びするもの却つて彼れの知己なるべしと答へ」た、という風にことわっている。抱一庵の評語中用いた「乱塗」の二字にさえ、疑念を抱いた程であると述べているのは既に見た。さて、その上で徐ろに「『吾亡妻』は偽物

なり」の断定を突きつけるのだが、これこそ緑雨独創の見解となるのだ。

料らざりき予は『吾亡妻』に欺かれたり『吾亡妻』は偽物なり何を以てか之れを証する、予は東京朝日新聞が載せたる虚子の『偶筆』の一を読みて有無なく之れを承知したり虚子とは誰そ『吾亡妻』の記者宮崎三昧道人が暫し世を詐<sup>あは</sup>らんといたる、仮りの名なり

虚子曰く「原君抱一庵が逸早くも三昧道人の『吾亡妻』に就て感を書したる文を読み欣然として君の誠ある涙珠が至情の文の為に墮ちたるを喜び」云々、又曰く「紅色<sup>くれなゐ</sup>に看入りて而<sup>しかる</sup>後に黄<sup>のち</sup>なり白なる者を見る時は黄なり白なる者亦卒<sup>つひ</sup>に紅し顧ふに予が涙の風流悟に墮ちし所以の者は予が眼の『吾亡妻』に紅化せられし為にはあらざるか」云々と、而して其の予なる者の三昧道人なるを人知らば如何、予は縦令<sup>たとひ</sup>否々の二字に虚子が其等の語を打消したるを見るも、打消さるゝ如き語の『吾亡妻』の記者の口より出たるを訝<sup>いぶ</sup>り匿名の斯る事に用ひらるゝの調宝過ぎたるを訝る (傍点原文)

匿名「虚子」の正体を、何を隠そう宮崎三昧、すなわち「『吾亡妻』の記者」自身と訝<sup>あは</sup>いて見せた箇所である。緑雨みずから圈点を付してある「世を詐<sup>あは</sup>らんといたる」という表現からも既に察

せられるように、緑雨は先ず何よりも文学者（それも大家）宮崎三昧の文学者としての徳義を問題にしている。これは、本件に関して緑雨に終始一貫する立場である。『国会』在社期を中心としたこの時期、緑雨の批評モチーフと関心は主として文学者の徳義問題に向けられていた。

また、右引用文の末に「匿名の斯る事に用ひらるゝの調宝過ぎたるを訝る」とあるが、「斯る事」の意味内容は微妙である。普通にはこれは、自ら為した作を自ら称えること＝自讃の意と解することができようが、おそらく緑雨はただそれだけで三昧が「世を詐らんとした」と裁定し、「文学者の徳義」を問題としたのではない。みずから匿名を使って称揚される当の作品が「吾亡妻」という特殊なものでなかったら、緑雨ははたしてこれほど大きな問題として取り上げたろうか。次に引用する部分でそれはより一層はつきりすると思われるが、実際、右の「斯る事」には「吾亡妻」におけるが如き極めて特殊な場合、という意味も込められてあると見るべきであろう。つまり、緑雨にとっては、単に「自作」を「匿名」で評するという、所謂「匿名（自著）自評」それ自体が問題なのではなく、それが特に「吾亡妻」という述作に対して行使されたということ、そしてその行使が公正な「評」ならぬ不当極まりない「称」の形でなされたということが問題なのだ。

「自評」とは言い条、その実この場合は明らかに「自讃」であり、それも「虚偽」性を孕んだ不当な「自讃」である。緑雨の非難はもとより、こうした固有性の相の下においてであった。決して一般論的意味において匿名の自著自評を咎めて<sup>注6</sup>いるわけではないのだが、実にこの一点がやがての鷗外との論争において大きな意味を持つてくる。先走っていうなら、一般論で形式論理的に「（自著）自評」を論じて挑んでくる鷗外に、緑雨のこの意はついに無視され続けたのだたし、そうした鷗外の巧みな論争術にまんまと嵌まった形となり、逆に自説の全き開陳を阻まれた所に緑雨の不覚があったのだった。

悲しき人が悲しき事を記したるものは『吾亡妻』なり「これを愚痴の積聚と嘲られんか将た真情の結晶と称へられんか予は唯触感の有の儘を打出して毫も偽り飾ることなきなり」とは三昧道人自らが予て世上に広告したる所なり孰れか悲しとせざらんや然れども其触感を有の儘に打出したる人が此の世に神の口利くことなければとて虚子なる面を被つておのれより先づ至情の文といひ紅化せらるといふ是れ世に有り得べきことか為し得べきことか、有り得べきことなり為し得べきことなりおのれの名を銜はんとするいやしき心根に於て有り得

べきことなり為し得べきことなり予は此の故に『吾亡妻』は  
三昧の我を銜うもの即ち偽り飾るものなることを断言するに  
憚らず寧ろ断言すべき由を『吾亡妻』に教へられたるもの  
なり

緑雨の主張は明白であるが、そのつながりにおいては少しくわ  
かりにくい所がある。以下、私に整理して見直してみよう。先ず  
緑雨の立言。

(一) 三昧の「吾亡妻」は三昧自らによって夙に妻の死という悲  
しい事実を「唯触感の有の儘を打出して毫も偽り飾ることな」く  
記したまでと公言されている。

(二) しかし、その三昧が先ずみずから匿名を用いて「至情の文」  
といい、「紅化せらる」云々の本来有り得べからざる言を為した。  
(三) これは「おのれの名を銜はんとするいやしき心根」によっ  
てのみ、有り得ることである。

(四) 故に「吾亡妻」は「三昧の我を銜ふもの即ち偽り飾るもの」  
と断言できる。否、断言しなければならぬ。

しかして、右四項のそれぞれの項目間には、多少の違いこそあ  
れ、ことごとく一種の論理の飛躍が存在する。正確には飛躍とい  
うより、緑雨にとって自明であったが故にわざわざ書きあらわさ  
れなかった暗黙の前提と言うべきだろうが、それを次に補って、

緑雨の主張をより鮮明ならしめよう。

(一)から(二)に移る過程には、筆者三昧にとって「悲しき事」を  
「唯触感の有の儘を打出して毫も偽り飾ることな」く記したのが  
「吾亡妻」なら、既に他言を要さず(要する筈もなく)、まして  
みずから率先してその文を賞め讃えるなどでき得べきものでない  
という緑雨の観念が前提として存在している。

もともと「吾亡妻」は世に所謂「小説」ではない。<sup>7</sup> 少なくとも  
そうした触れ込みであった筈で、つまるところ、何がしか作って  
その創作性の芸術的価値に対する評価を他に俟たんとする(また  
そうすることが正当な)所謂普通一般の小説と同日に論ずべきも  
のではない。<sup>8</sup> 愛する妻の死という「悲しき事」を「触感の有の儘  
に打出」すことが、そのまま少しでも筆者の悲しみを和らげる  
というような所に、あるいは三昧自身の広告文によれば「亡妻を  
世間許多の有情才子淑女に紹介せんが為」というような点に、多  
少の望みを託して「毫も偽り飾ることな」く綴った文章で(ある  
筈で)あった。だからといって必ずしも世の高評を期待してはな  
らないと断ずることはできないが、一般の小説のように文章・趣  
向等における虚飾(虚構)を彼我(読者と作者)相認める前提と  
して、その「作品」としての完成度を世に問うことを第一義とす  
るものとは初めからわけが違ふのだ。三昧とてそれを当然意識し

ていたからこそ、広告文に「これを諸名士が錦繡の腸より出たる小説に問ふる明に其不倫なるを知る」と記していたのであった。

いわば、「つくらず書くこと」それ自体が目標であるようなもの、それが「吾亡妻」であり、「悲しき事」を経験した直後の筆者の心情を思いやるに、本当はともその文章の世間的評判とか、同情の多寡など慮っていられる筈のものではないのだ。そして文学の皮肉は、往々にしてそうした文章の方が虚構性を前面に押し出した「作品」群よりも多くの同情と好評を以って世に迎えられる傾向があることであり、特に小説を中心とした「文学」を受け容れる時代状況が現代をはるかに溯る明治中葉なのであってみれば、なおさらその傾向は顕著にならざるを得なかったであろうと想像できる。「文学」受容のあり方にもおのずと素朴から洗練の（場合によってはまた逆の）変化が認められるものだからだ。そして「吾亡妻」に関して言えば、ことの事実性と真情を売り物にしつつ、これほど世の好評を博する条件を備えた文章は当時の文壇にはほとんど皆無であったとさえ言えるのではあるまいか。

そして(三)を勘案して言えば、前述のような普通一般の小説にあってすら、実は、率先して匿名を用い己が作を不当に持ち上げ誉めるなどという、利己的売名的で不徳な行為は慎まねばならないのに、三昧は最もそうした行為と縁遠くなくてはならない「吾亡

妻」においてやすやすとそれを為した、それは「世に有り得べきこと」では絶対でない、というのが緑雨の主張していることなのだ。

(二)から(三)に移って、右の如き行為の因を「おのれの名を衒はんとするいやしき心根」と定める所にも、一種の恣意的推断が認められる。なぜなら、これは他にもその因を求めることが不可能ではないからで、たとえば後の鷗外のように「自信」がそうさせたとは弁じること可能性としては有り得たからである。もちろん、他にも可能性のある中からの断定という所に緑雨の恣意の働いていることを確かめておけばよいので、それが誤りであるというつもりはなく、おそらく緑雨の判断が正しいであろうことは、既に「偶筆」文について見てきた通りである。ただ、こうした断案が下される背景というか、文脈について更に一言しておくなら、緑雨のように日頃から文学者の徳義・人品というものに甚だ敏感な人間、いわば「文は人なり」的の観念を確信を持って生きているような人間には、右の如き行為はその負の面ばかり相乗的に強調し合って受け取られたであろうこともまた想像に難くない。緑雨においては（その各種の批評文に窺える如く）当時の文学界というものは、誰しも「大家号」を得る為に汲々とし、一度得たら飽くまでそれに固執してやがて作そのものの質など顧みない、実より

名を優先して考えるような文学者達の集まり寄ったもの、別言すれば先進欠徳後進欠礼の見苦しきありさまと考えられていたという文脈も、当然それに関わっていたらう。

さて、もっとも屈折しているかの感を与えるのが(三)から(四)への移行過程ではあるまいか。普通なら(一)―(二)―(三)と来て、結局「おのれの名を銜はんとするいやしき心根」を押さえた(三)をそのまま受け継いで、三昧の売名行為なり、あるいはそういう売名行為を為した三昧自身なりを「偶筆」文とのかね合いで批判攻撃するところに落ち着いていると思われる。後に「世を欺きて予輩が涙を絞り掠めんとしたる文壇上の天一坊も些古ければ差向東海悦郎なり」と、当時新聞紙面を賑わした詐欺師の名前まで持ち出して言っているが、その上で「文学者の徳義」を云々して落ち着くような三昧批判が普通なら行われるところだろう。だが、緑雨の主張はこれと趣きを異にする。「偶筆」によって「おのれの名を銜はんとするいやしき心根」を看取された「吾亡妻」の「記者」三昧はもとより「文学者の徳義」上の責を負わされるべきである。が、それのみに止まらず、既にそうである以上、そうした「虚偽」を見透かされる「偶筆」を書かれて不当な自讃を施された当の「吾亡妻」そのものも「偽物」、すなわち「三昧の我を銜ふもの即ち偽り飾るもの」「世を欺きて予輩が涙を絞り掠めんとしたる」作で

あると断定し断罪されるのだ、というニュアンスで緑雨は(三)から(四)へと批判を展開している。著者みずから言い、みずから認めるところの「情の至切」「至情」など真ッ赤な嘘であると一気に喝破したのである。

つまり「虚子」の「偶筆」から三昧へ、そしてそこには止まらずさらに「吾亡妻」へと緑雨の糾弾は及んでいくので、そこに「偶筆」文の修辞上の不当を責めた雷音洞主と、「吾亡妻」の結末部分に疑念を表した福泉みやびと、また双方の文の著者たる宮崎三昧に対する徳義上の批判等をまるまる包み込んで止揚した緑雨独自の批判的立場が宣明されたことになると言えよう。

また(四)にあたる原文の

予は此の故に『吾亡妻』は三昧の我を銜ふもの即ち偽り飾るものなることを断言するに憚らず寧ろ断言すべき由を『吾亡妻』に教へられたるものなり

の後半部分には、このあとの叙述と合わせて、亡妻への悲しみの真情を売り物にした「吾亡妻」を「虚偽」と知らず当時非常な好評で迎えていた文壇ならびに世間への念の入った警告の意と、自身も初めは感動して読んだという緑雨の、欺かれた者の一抹の憾み・悔しさといった感情を読み取っていかもしれない。文学者の倫理・徳義の墮落をこれを機に世に訴えずにはおかない、とい

った緑雨の意気込みもここには窺うことができそうだ。

続けて緑雨は、例の福泉みやびの「吾亡妻」評の、特にその結末部に関わる所を「尤も宜し」と高く評価し、みずからの同じ結末部の読みに関するエピソードの紹介から入って、次のような三味道人断罪の言を以って終わる。

予も『吾亡妻』の偽物なるを知らざるの前に於て其結末の

侃や再び母なかるべからず萱氏再び婦なかるべからず予再び室なかるべからず照子霊あらば頼に來りて繼室の人によ

れ

の一句にはひそかに顔をしかめたるも俗に曰ふ顛倒の際過ちもあるべしと見恕したるが今にいたりて之を思へば『吾亡妻』は求婚広告なり何すれぞ室なかるべからずを二度繰返さざりしやと或人の嘲笑したるは満更お菊を責めたる鉄山ほどの酷にはあらざるを知りたり況んや是れも触感の有の儘を打出したる一部分なるに於てをや、予は云はんとす三味道人は「死に至る迄わが妻を欺け」るのみならず世を欺きて予輩が涙を絞り掠めんとしたる文壇上の天一坊も些古ければ差向東海悦郎なりと

悲むべし文学者の徳義これ程にも落ちぬ、敢て問ふ照子の君、君斯くても猶ほ「青苔の下佳城の中燦然として多栄を謝する」

や君は三味道人がおのれの名を銜はんがために君を「世間許多の有情才子淑女に紹介」したるものなるを知るや、照子の君霊あらば速かに來つて三味道人の膝に嚙付け、而かも三味が罪を謝するなくば予は今日の大家資格の末に左の一くだりを添て後進者の惑なからんことを期すべし曰く

大家妻なかるべからず妻死せざるべからず妻死して文なかるべからず

大息々々

当時まだ「吾亡妻」が雰囲気として持っていた世間的に「聖」化されたイメージを根底から覆して余すところのない痛烈無比な諷刺的筆法を用いたのであった。

#### 四

以上のような緑雨の「荆鞭」の反響は小さくなかった。結論から言ってしまうと、それまで亡妻哀悼の情を綴った真摯清廉の、至情溢れる名文章として多大の評価を世に贏ち得ていた「吾亡妻」が、一転して「偽物」と化し、同じく世に同情と好感を以って迎えられる「悲しき人」たる著者宮崎三味が、一大「罪人」と成り変ったのである。見てきたように、それ以前の「虚子が言について」に於ける雷音洞主露伴の批判や、福泉みやびの「国民之

友夏期大付録評論」中の部分的批判などによって「荆鞭」への道筋は既に充分醸成されていたと言えるが、それまでの「吾亡妻」評価を根底から覆したのは、やはり緑雨の「荆鞭」であった。そして、この目まぐるしい評価の変転を、「荆鞭」の反響として具体的に体现しているのが、九月五日の『自由』新聞紙上に現われた「蚯蚓子」の「読正太夫子荆鞭」であり、翌六日踵を接して『東京新報』紙上に掲げられた「吞吐乾坤生」の「三十三時間の遊下」であった。順として「読正太夫子荆鞭」から見ることによ

う。

蚯蚓子は言う。

正太夫子は三味道人に於て、何の仇かある、何の怨かある、三味道人か其亡妻を捻出して好題目となし、銜名の積聚と、偽情の結晶とを有の儘に打出したる『吾亡妻』に向ひて荆鞭を下し、遠慮会釈もなく『吾亡妻』は偽物なりと喝破す（中略）予輩は窃に正太夫が三昧に仇あるを疑へり、他人か早天より読み始めて黄昏に達したりとか、涙珠か真情の為に堕ちたりとか、追従的称賛と、娼婦的涕涙とを以て充たされたる真中に突立ち、三味道人は（中略）文壇上の東海悦郎なりと論断す而して其証憑は正太夫か発摘したる虚子が自白に

於て充分なりとす、予輩は是に於て知る、正太夫は三昧に仇あるにあらず、文学社会の徳義を保護せんが為め、己むを得ず涙を揮ひて其虚偽を摘発し、忌まず憚からず、公明に正大に論断を下せし者なるを知る、嗚呼是れ正太夫の正太夫たる所以歟、（傍点原文）

このあと蚯蚓子の論調は「近時文学社会の徳義大に壊損し、幾多の軽薄才子文壇に跋扈」する文壇のありさまに対する批判へと転じ、

人は称す明治の奎運は隆盛なりと、予輩之を信ずる能はず、且つ断じて云ふ、今日の文学社会は紛々たる軽薄才子が其名を銜はん為め、文壇に立ち互に相称誉し相推援し、鬼面を被りて小児を威嚇し、声音を大にして盲瞽を驚倒せんとする者多き而已と、然り而して何ぞ図らん真摯痛快の言語を為す正太夫子の如き者あらんとは、

と述べ「今日の所謂才子」の「其名」のみ求めて、本来はより大切にし各々努めて蓄えるべき「其實」を蔑ろにする悪傾向に陥っている腐敗した文学界の傾向と、そこにあって独りおのが信ずる（「理」の）儘に直言直筆して他に憚らない「正太夫」の批評姿勢を讃え、古の歴史家に因んで「董狐文学者」の称を与えている。ほぼ全面的な「荆鞭」支持の言だが、後半の文界認識は、次の乾

坤生にも、更には自評論争に関わった緑雨、漣、鷗外にも基本的に通ずるものであったことを予め指摘しておく。

さて、吞吐乾坤生の「三十三時間の遊下」は、その標題からも察せられる如く、一種の紀行文であり、新橋を発して富岡に友人と二泊し、再び新橋に帰るまでの事を記した文末に『国民之友』夏期付録の「吾亡妻」の読後感を述べ、又「追記」として緑雨の「荊鞭」に言い及んだというものだから、蚯蚓子の文と違って純粋な「荊鞭」評でも「吾亡妻」評でもないが、これはこれでやはり一つの「荊鞭」の反響ということは言い得る。以下は、「吾亡妻」について述べている部分及び一字下げで緑雨の「荊鞭」に触れた部分である。

富岡より横浜に帰る舟中、近頃世に評判高き国民之友夏期付録に就て宮崎三昧道人の吾亡妻を読んだり文章は正しく推敲と彫琢とを加へたりと覚しく処々斧鑿の痕を留めて生硬の字句も時々には見当れど概して字鍊字烹といふを得べし然し其割合に真情真摯の処少きは世評の大に我見に違ふとていと怪みつゝ読みもて行きたるに斯くも愚痴になるものかと立つて哀傷悲痛したる大文字は「予再び室なかるべからず照子霊あらば頼に來りて継室の人によれ」の一句を以て結ぶに至りリットン男が軽薄男子の双棲の樂に関する觀念に付き

其主人公の一人をしていはしめたる謔罵の言に（英文略——筆者）とありしさへ思出で予が三昧道人の文を通読して一滴の涙だに催さざりしことの偶然に非ざるを知りぬ嗚呼果して軽薄なるか將た道人の文章未だ到らずして摯実の真情を表発する能はざるか世には祭十二郎文など併評したる旨もあるものをと近来一種の自称文士間に互に諛言を以て相銜ふの風あるに思到り覚え吐息を漏しぬ

去る三日の国会に正直正太夫の吾亡妻を評せるを載せたり予は一読節を拍て其見る所の予に同じきを歎じ而して太夫が皮肉を穿つ筆鋒の鋭利なる罵て以て「再婚の広告」とするに至り覚え案を拍て痛快と叫びたり予は道人と恩讐あるに非ず独り斯文の為に直言せざるを得ざるのみ顧ふに太夫の心事亦應に必ず此の如くなるべきを信ず

#### 吞吐乾坤生追記

例えば三昧自身が「『吾亡妻』の末に書す」の中で自認して述べていた「情の至切にして文の至拙なりし」といった言と、初めから全く相反した読後の感想を抱いていたというわけだ。特に「吾亡妻」の結末部を問題にしているのは福泉みやびや緑雨と同じだが、「近来一種の自称文士間に」以下の、近時文界の悪弊批判は先の蚯蚓子の言とも重なってくる。面白いのは「世には祭十二郎



文など併評したる旨もあるものを」の一条で、これは蘇峰を初めとする当時の「世評」のいくつかへの皮肉の範圍を越えてしまつて、期せずして「吾亡妻」を書いて透かさず「『吾亡妻』の末に書す」——見て来たように三昧はそこで「祭十二郎文」を何度も引き合いに出していたのであった——を著わした宮崎三昧そのひとへの痛烈極まりない皮肉となっている。

「追記」部分に関しては、蚯蚓子文と同じく全面的に「荊鞭」に賛同の意を表したものと認められる。緑雨の「荊鞭」もまた、逸早く少なくとも二個の賛同者を獲得したと言えよう。

緑雨は九月十二日「荊鞭」の(四)「南翠閑あらば予に誨へよ」とともにその(五)「倍々奮つて荊鞭を書かん」を掲載し、右の蚯蚓子・吞吐乾坤生二名の説を紹介しつつ、いよいよ以って「斯道のため」に「私意を挾さ」まぬ批評を書き継がんことを宣言した。次のようなものである。

予が去る三日の紙上に於て三味道人の『吾亡妻』を評して偽物なりと云ふや来る者会ふ者皆曰く酷なり氣の毒なりと、成程三味道人一人に対しては或ひは酷ならんも知るべからざれども予は今の文壇に後進者の行手を遮る一大障礙物あるを取除かんためには唯だ氣の毒なりとの故を以て筆を枉ぐる能は

ず(以下、蚯蚓子、吞吐乾坤生の言紹介——筆者)然り予は三昧と面を合せたる唯一回詞としては互ひに居所を告交はせたるのみ恩もなし怨もなし予は唯斯道のために足らはぬ力も尽し得んだけは尽さんとおもへば万一『荊鞭』に私意を挾さむたりとも見ゆることのあらば首打たれんも惜しからじとは予が其前或人に贈りたる書状に明記したる所なり蚯蚓子といひ吞吐乾坤生といひ幸ひに天下、見る眼あるを喜ぶ否々見る眼のあると否とは予の関する所にあらず益々奮つて『荊鞭』を書かん

先ずはこれで、一連の宮崎三昧「吾亡妻」をめぐる(いわゆる自評論争以前の)文界の動向は一段落ということになる。「吾亡妻」が著者三昧自身による紹介という鳴り物入りで世に現れたのが八月中旬で、初め幾多の好意的評価を以って迎えられるも、やがて「虚子」名での匿名批評とも絡んで少しく部分的な批判が寄せられるようになり、緑雨の「荊鞭」によってずばり「偽物」の判定に止めを刺されるに至るのが九月初め、一箇月にも満たぬ短期間に、実に鮮やかな「吾亡妻」評価の逆転劇が演じられたわけである。

だが、これで一段落したと言っても、これから凡そ二箇月の後には、この「吾亡妻」評価を、より正確には「三昧罪人説」を更

に覆すべく、例の西欧論理の学を引っ提げた森鷗外が登場してくるのである。具体的には、その自家用評論雑誌と言える『しがらみ草紙』の第二十五号（十月二十五日発兌）誌上に掲げた「山房論文 其六 美妙斎主人が韻文論」の一節で匿名自評の可を唱えたのであるが、鷗外・緑雨・漣と、それにまた幾人かの論者も加わって延々翌年春にまで引き続くこととなったいわゆる「（自著）自評論争」は、ここに幕を切って落とされたとと言えるのだ。

## 注

1 緑雨は「、、」の筆名で著わした「国民之友夏期付録を讀みて」（『国会』明24・9・9）で「風流悟」「空屋」「曇天」を評しているが、その「風流悟」評は左のようなものであった。

洞主が自ら記したりと聞えたる広告に曰く「此篇を讀み了つて能く真趣を解し得む者は日本国裏唯三人ならむ其一人は作者自身なり他の二人は葡萄の如き眼をもつて讀まざる人なり」と、後又虚子が言について答ふる始めに曰く「我はじめ風流悟を作すや心ひそかにおもへらく野人の惡文畢竟江湖の秀才雅客が評論を招くに足らざらむと」と、予は洞主が其何れを前に何れを後に何れか公けに何れか私かに思ひたるやを問ふの必要なし唯だ

『風流悟』を讀みて左の唄あるをおもひ出しぬ

忍ぶ細徑みちに松と胡桃は植ゑまいまつ夜に其身がくるみでもなしなよさて誠にくるみでもなし

2 幸田露伴と宮崎三昧の個人的關係については、先ず三味道人の「露伴子」（『大阪朝日新聞』明23・5・15）に露伴小学校卒業後の依田学海を介しての二人の奇遇ともいふべき再会が描かれており、さらに露伴側の座談会（幸田露伴氏に物を訊く座談会）での「後に私を村山龍平氏（『朝日新聞』社主！筆者注）に推薦したのも、饗庭君と宮崎君でした」という発言も参考になる。また露伴が一時期同居したこともある一代の畸人朗月亭（滝沢）羅文が丁度この年の夏逝去し、露伴は八月十九日、根岸党の高橋太華、饗庭篁村、宮崎三昧に宛てて翌日の出棺予定時刻を知らせに使いを立てているといふことがある（岩波版『露伴全集』第三十九卷所収書簡番号一九参照）。しかも露伴の「遅日雑話」（『文章俱樂部』昭3・3）によれば、谷中玉林寺に葬られた羅文の墓碑名は「文は宮崎三昧、字は私の若い頃の筆」に成るといふ。これらも露伴・三昧の関わりの深さを知るよすがとなりえよう。「虚子が言について」執筆動機についても、たとえば塩谷贊などは「露伴は単に癪に障ったまでのことであらう」と『幸田露伴』上巻（昭40・7）の中で認めている。

3 露伴の弟幸田成友の『凡人の半生』（昭23・4）には、この辺の

ことについての言及はない。一方、塩谷賛は前出書で、これを羅文の葬儀と関連させて「注意すべきことは『虚子が言について』はこの十九日号から新聞に出たのであり、虚子とは三昧のことだったのである。四日目の『虚子が言につきてについて』には虚子が数回来たとあるが、そのとき露伴はこの羅文の葬式の直後はそこへ毎日出て行って世話を見てやり、実際に留守だったのである」と述べ、露伴の叙述を事実として受けとめている。

4 『しがらみ草紙』第二十三号（明24・8）掲載の「五君詠」という漢詩形式の批評のこと。「風流悟」については、「真情絶愛倩君尋。此意原期楽不淫。元禄文中推露伴。風流洞裏作雷音。恋如牢獄言何幻。眼似葡萄罵亦深。纔有三人呼絶妙。読来誰解頂門針。」（圈点省略―筆者）と評してある。

5 文中「予を以て見るに今の小説家の多くは一二軽薄児の、贈るに大家号先生号を以てしたるに安心し安心の極、凶に乗るの傾きあり」云々とあり、当初よりいわゆる文壇大家に批評の照準が合わされていることが明示されていた。

6 「自著自評」の語と「自評」の語が当時併用されているが、本来ならやはり「自評」と言うべきであろう。但し、本稿では便宜上二つの語をほぼ同義として併用することがある。

7 最近、三好行雄氏は「△反近代△の源流」（『海燕』昭62・2）、

「前近代と近代」（『日本文学講座2 文学史の諸問題』昭62・5）などで自評論争に触れて、宮崎三昧の「吾亡妻」を「私小説の嚆矢」とする見解を示されているが、本稿ではあくまで当時の文学史的な脈に即して検討したいので、右のような見解は敢えて採らない。

8 鷗外は「答忍月論幽玄書」（『しがらみ草紙』第一四号、明23・11）の中で、

君は固より銀鈎鉄画の出師表も一字一涙の祭十二郎文も併に是れ美術品（詩）に非ざるを知り玉ふならむ。美術品に非ざるものゝ人を泣かしむるは、実体的情感にして、美術品の人を泣かしむるは、審美的情感なり。両者の別はハルトマン之を性別に求め、エルドマン之を量別に求めたれども、（エルドマンが説は最近発兌の「グレンツボオテン」に見ゆ。）其相殊なることは、疑ふべからず。

と述べ、「出師表」や「祭十二郎文」と自らの「うたかたの記」（文中では「空像記」―筆者注）を同列に並べた形で評を下した忍月に反駁を加えているが、鷗外が前二者と自作を峻別するに用いた「実体的情感」と「審美的情感」の概念は、ある程度「吾亡妻」と「曇天」「空屋」等普通一般の小説作品との（特に享受レベルでの）差異を考える上での示唆を与えてくれるものではないか。後述のように「吾亡妻」を「祭十二郎文」と同等に扱うことなど到底できな

いにせよ、当時「吾亡妻」が世間に受け入れられたのは、やはりその「実体的情感」に負う所が大きかったのではないか。そして、もちろん三昧自身はその間の事情に充分意識的だったのである。

9 福泉みやびの評中にすら「祭十二郎文」の名は見えるが、別にたとえば当時の批評の中では、劉々生の「『吾亡妻』を読む」（『朝野新聞』明24・8・14）なども「吾亡妻」と「祭十二郎文」を併評した批評文の好例である。後半の一部を引く。

「吾亡妻」の文字必らずしも巧ならず道人亦た決して経意の作に非るべし只だ其れ然り故に至情惻々人に逼り幾回之を繙読するも猶ほ且つ断腸に堪へず人をして恍然殆んど他事を思ふの念なきに至らしむ祭十二郎文を読んで泣きたる当時の涙と生が此文を読んで泣きたる涙と前後実を生をして悲哀の極に沈ましめたり